

びわこの 考湖学

— 第3部 —

11

さまざまな漁場がある広い琵琶湖には、内湾の入口に砂州が形成され、湖と内湾が遮断された内湖が多数ありました。現在は、その多くが干拓や埋め立てにより、その面影を残すものは数少なくなっています。

跡からは、縄文時代の骨製のヤス、釣針、石錘や丸木舟、古墳時代の鉄製ヤス、漁網の土錘や浮子などが多く出土しており、琵琶湖や内湖で漁撈が行われたことを雄弁に物語っています。

琵琶湖に生息する多くの魚たちは、春から夏になると産卵を目的に湖岸に集まるため、人間にとっては捕獲しやすくなります。一方それ以外の時期は沖合や深場に戻ってしまう習性があり、漁法もそれに合わせて変化したと考え

湖底に残された鉄製ヤス



湖底に突き刺さった鉄製のヤス

られます。

縄文時代中期後葉（約4500年前）になると、釣針が使われるようになります。これ以降、丸木舟を使って沖合での漁撈が盛んになったと考えられます。

すなわち、ヤスなどをつかって魚などを直接刺突する湖

岸部での漁撈に加え、丸木舟と釣針を使った沖合や深場での漁撈も縄文時代の中後葉になると行われるようになったのです。内湖は、当時の漁民たちにとって格好の漁場であったと言えます。ちなみに、琵琶湖での釣針を使う以前の漁撈は、石山貝塚や粟津湖底遺跡から出土した土器片錘（土器の破片で作られたおもり）や石錘が示すとおり、網

漁が盛んに行われました。さらに、入江内湖遺跡から出土した古墳時代の鉄製のヤスは当時の最も先進的な漁具でありました。鉄製の漁具が普及するのは古墳時代の後期です。鉄製のヤスの出土例は、県内の雪野山古墳や京都府の樺井大塚古墳などがあります

が、その多くが古墳の副葬品です。

つまり、このような入手困難で貴重な漁具を利用できる漁民は、単なる漁師ではなく、支配階級に魚を献上するため、特別な漁民であった可能性があります。

入江内湖遺跡では、3本の刺突部が組み合わせられたヤスが地面に突き刺さった状態で出土しました。まさに魚を狙って突いた時、的が外れ先端だけが地面に突き刺さり抜けなくなつて放棄したまま埋没した状況を如実に表しています。

また、視点を変えると、ヤスを使った漁法は、まさに琵琶湖の魚捕りの特徴である魚を取りすぎない漁法、魚の繁殖を妨げない漁業であるとも言えるでしょう。

魚の繁殖妨げない漁法

規模な複合遺跡があることが、これまでの発掘調査で明らかになっています。この遺

（財団法人滋賀県文化財保護協会 吉田秀則）